

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390800185		
法人名	有限会社 あい		
事業所名	グループホーム大道		
所在地	熊本県山鹿市方保田828-2		
自己評価作成日	平成31年3月3日	評価結果市町村受理日	令和元年5月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php">http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成31年3月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所理念である「その一瞬一瞬を大切に共に生きる」を軸に一人一人の個性、「その人らしさ」を大切にご家族とも協力し合いながら「大道に来てよかった」と利用者、ご家族、スタッフ、関わるみんながそう思える場所を目指しています。  
月日の経過に伴う利用者の老いや喪失感をそれぞれのスタッフがしっかりと受け止め、向き合い、寄り添う気持ちを大切にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームが歩んできた道のりは家族や地域にしっかりと浸透し、入居者優先の考えのもと職員が同じ方向を目指して邁進している。起きたいときに起き、寝たい時に寝てもらい何気ない生活を支え、入居者が望むことに向き合う姿勢は地域の評価となって、新たな入居に繋がる等信頼を得ている。開設当時から続いている「秋まつり」は、地元の人々や消防団、職員の関係者の協力を得て地域行事の一つとして定着し、本年度は200名もの人が参加して祭りを盛り上げている。交流のある保育園とは、遠足時のトイレ休憩や食事場所として庭先を提供し、地元農業高校生のリヤカーでの物品販売への協力など、ホームが出来ることで交流を図り、地域の一員として活動している。運営推進会議を活用し、「身体拘束適正化の取り組み」についてはホームの現状を発信し、参加者から貴重な意見を得るとともに、拘束に繋がる行為についても啓発するいい機会となっており、地域の参加者が毎回多数足を運ばれることから、ホームへの期待の大きさが窺える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	自分たちで考え作った理念であり、スタッフ各々が日々のケアの中で振り返る習慣がもてている。 また、定期的にスタッフで見直す機会をもっている	法人の理念をもとに作られたホームの基本理念、「その一瞬一瞬を大切に共に生きる」とし、パンフレットの中に明記するとともに、別紙にて理念を原点としたホームの心得を入居者や家族、地域や職員自身に向けて啓発している。入居者への「あなたにできること・できないこと」「分かること・分からないこと」を知り、あなたらしく生活し続けるお手伝いをします、の文言には入居者と日々1対1でゆっくり向き合う基本姿勢が込められている。	ホームの地域での長年の努力はしっかりと浸透し、受け入れられており、入居者に向き合う姿勢が新たな入居に結び付いている。今後も変わらぬ支援を期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区役や行事や予防拠点事業、利用者さんの散歩、飼い犬の散歩、スタッフの通勤時に関わる機会も多い。また秋祭りでは地域の参加や協力も多く地域で作る祭りに近づきつつある	地域へ向けての基本姿勢は理念に込めた心得に謳われており、ホームが地域にあることで、地域の人々の安心となるような存在になりたいとしている。「秋まつりはいつですか〜！」と、地域から声を掛けられるなど、地域行事の一つとして定着しており、準備には地元の人々や消防団が協力し、毎年盛大に行われている。日々の散歩や野菜の差し入れなどを通じて、人々と普段の関わりが出来ている。	ホームが目指してきた地域への浸透が充実した今、更に防災活動などを通じて連携を図りたいとしており、今後の取組が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	予防拠点事業や祭りなどで利用者に関わる機会を作ること顔見知りとなり実際にホーム外に出られる利用者に対して気掛けて頂くことも多い		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームでの暮らしの様子を写真や文書にて報告している。敬老会の時には委員の皆さんにも同じ空間で過ごして頂き感想や意見を頂いている。外へ出られる利用者について報告や検討の場を設けている	ホーム内の予防拠点ルームを会場としており、特に地域からの参加が多い会議となっている。ホームの活動報告とともに、予防拠点「おいでませ」についても写真や資料をもとに活動内容を説明している。本年度より義務付けたとなった、「身体拘束適正化に向けた取り組み」について参加者にホームの現状を発信することで様々な意見があがり、同時に参加者の拘束への認識を新たにし、連携の必要性が議論されている。	ホームが継続して取り組んでいる食事、排泄、入浴といった日常の支援内容を伝えることで参加者にはより身近でわかりやすいものになると思われる。また、交流のある地元高校などの関係者に、毎回でなくとも会議への参加を打診してみることも検討願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に参加頂くことや確認が必要なことがあった際には相談している。 行事の際の協力も頂いている	行政担当者が毎回運営推進会議に参加しており、ホームの現状はしっかりと伝えられ、地域との関係性についても理解が得られている。管理者は必要があれば電話や直接行政を訪れ、意見をもらうようになっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の「身体拘束はしない」という方針をもとに勉強会を通して「自分や自分の親がされたら」という当たり前の視点を大事に検討している。適正化委員会を行い振り返りや検討の場を設けスタッフへ周知している	開設以来、法人全体で拘束はしないことを基本として運営している。入居者主体のケアを前提として、自由に敷地内を散歩される方の転倒や門外に出られた場合のリスクを話し合い、運営推進会議で、もしもに備えた地域の協力を依頼している。管理者は職員のメンタルにも十分配慮し、意見に耳を傾け、夜勤を終え退勤するときの声掛けや他職員からのありがとうや気を付けての労いの一言が、仕事へのモチベーションに繋がっている。	他の事業所での実例をもとに会議を開き、アンケートをとることで拘束や虐待に対する職員の意識向上に繋がっている。何事も全体で考え全員で対応するというホームの方針に連結しており、継続していかれることが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会や会議において検討する場を設けると共にケアを検討するうえでも「本人の気持ち」を大切に決めるようにしている。スタッフのストレスについてもお互いにフォローできるように心掛けている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学ぶ機会を設けていないため今後の課題である		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時はもちろん、制度改定時など年に1回はご家族への説明会の場を設けている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や必要時には電話などで状況報告を密に行い意見や要望を確認するよう心がけている 受診や買い物をご家族にお願いすることで利用者のことを知って頂く機会も増えている	運営推進会議には家族とともに入居者も同席しており、ホームの一員として情報を共有している。家族の面会時や受診の日には入居者の近況を伝えながら、遠慮なく意見をもらうよう投げかけている。「買い物をしたい」、「墓参りに行きたい」、入院中の入居者の「早く大道に帰りたい」など普段の会話から希望を引き出し、支援に反映する様努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議などでスタッフの意見や提案を確認する機会としている。普段からもスタッフの意見を確認しケアの方向性を決めている	定期的な会議や研修会はもとより、普段から何かあれば話し合う体制ができている。介護業界の人手不足が叫ばれる中でも、ホームの人員にはゆとりがあり、入居者優先に徹しながら業務にあたっている。管理者は職員の健康管理に心を配り、法人開設者自身もケアに入り、ホーム全体を把握しながら、職員意見を法人にあげ、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月に一回の運営会議において事業所からの報告の場を設けている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	以前に比べ人員不足により社外での研修の参加は難しい状況があるが、法人内、事業所内研修は計画的に実施されている（他事業所の参加もある）		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	合同勉強会においては他事業所の参加もあり意見交換の場となっている。また事業所どうしお互いの行事にはボランティア協力をしている		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者や担当予定のスタッフと事前に訪問し本人やご家族、他事業所からの情報収集を行いそれまでの暮らしぶりを大切に安心できる環境を整えている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	いつでも何かあれば耳を傾ける意識をもち、実際に「ご家族からも何かありませんか？」の言葉を添えることを気をつけている 要望があった際にはスタッフ間で共有している		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	施設見学や相談の時点で入居だけではなく必要なサービスについてなど入居に至らなくとも情報提供を行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の年齢や性格に配慮しつつ役割をもって頂く中で励ましや元気をもらうことが多々ある。持ちつ持たれつの関係性を大切にしている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者にとってのご家族の存在の重要性を常に伝えている。ご家族とスタッフとがお互いに協力し合い利用者を支えていけるように適宜報告し情報を共有できるように心がけている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	継続出来ている利用者と年齢や体力的に継続が難しくなっている利用者とがある。ご家族の協力のもと面会や外出、なじみの美容師さんからの訪問理容の予定の方もいる	職員は入居後もこれまでの関係性が途切れないように、入居者の生活歴や家族の情報から収集した内容を共有し、支援にあたっている。家族の面会や受診対応、その後の外出や外食など家族の協力を得て入居者との関りを後押ししている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	縁あって共に暮らす者同士の関係性が自然と生まれている。必要に応じてスタッフが間に入りフォローすることもある。 看取り期の声かけ、励ましなどお互いの存在を大切にされていると感じることも多々ある		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	亡くなられサービスが終了してもお墓参りや回忌のお参りへ伺う。また行事の案内やメール、ハガキでのやり取りなど継続した関係性を大切にしている。ご家族が立ち寄られることもある		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話や表情、しぐさ、気持ちの変化などささいなことでも本人の思いや希望、意向に繋がるものとしてしっかりと拾いスタッフ間で共有できるよう努力している (大切にしていることシート・生活の様子シート)	職員は入居者の言葉を否定せず、会話の中に行きたい所やしたいことへの思いを聞き取り、申し送りや会議で共有し、プランに繋いでいる。重度化する中で意思表示の難しい方には選択肢を投げかけたり、表情を見ながら察したり、家族の意向と擦り合わせながら本人本位になるよう検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人やご家族、利用中のサービス事業所等からの情報をしっかりと集め把握に努めている。必要に応じてその場に足を運び実際を感じることも大切にしている。新たな情報も記録に残し共有するようにしている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の気づきを記録に残し本人のペースや残存機能を大切にサポートするよう気を付けている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の記録からの本人の言葉や要望、家族の希望を踏まえ計画を作成している。またスタッフからの情報や意見も参考にしている	入居者との日々の関りから聞かれた声や、家族の意向を優先しプランを立案している。自宅の様子を見に行くことで安心される入居者に付き添い、自慢の畑で採れた野菜を職員に分けられるなど、これまでの生活の延長を支え、ホーム生活に徐々に慣れてもらう内容を盛り込んでいる。プランは3ヶ月ごとに見直し、継続の可否を検討し、退院直後は内容を見直ししながら現状に即したものとしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気づきや本人の言葉、表情、ケアの実践、結果を記録し共有している。疑問点などは申し送り時に確認しあっている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入所まちの利用者に対して空室を利用し宿泊を試した。今後もニーズに応じて事業所として整備すべき課題もある		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	移動図書館の活用。外を歩かれる利用者に関しては地域からの理解と協力の声を頂いている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には入居前のかかりつけ医を継続している。必ず入居時に挨拶に伺い、状態の変化や受診時の情報などこまめにやり取りを行っている。ご家族に受診の協力は頂きながら必要に応じてスタッフも同行したり文書での報告をしている	希望するかかりつけ医を継続して支援し、入居時に管理者が担当医師と面会して、スムーズな受診や往診に繋いでいる。受診はこれまでホームで対応していたが、現状の把握と家族との共有を図るため、少しずつ家族での対応を依頼している。家族の中には事前にホームでメモを取っていかれる等協力が得られている。歯科については往診が主に行われている。主治医とは日頃から連携を図り、相談や必要な指示が受けられる体制を整えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回の健康チェックに加え日々の変化をこまめに報告、相談し助言を頂くことも増えている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	本人、家族の意向を確認し担当医や看護師、状況に応じて連携室とも協力しなるべく早期退院ができるように働きかけている。入院時にはサマリーを作成し情報提供している。また入院時にはスタッフもこまめに面会し経過記録の様子を記録し情報を共有している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時、家族説明会、そのほか必要時に方針の確認を行っている。また利用者との普段の会話から本人の意向を拾い上げる意識も持っている	入居時にホームの重度化・終末期に関する取り組みを説明し、その時点での家族の意向を確認している。その後看取り支援が必要になった場合、医師、家族と方向性を話し合い、本人・家族の思いに応える支援に全職員で取り組んでいる。この1年間に1名の看取りを支援しており、家族により泊まりの協力や最期は遠方の家族が駆けつけるのを待って永眠されるなど、安らかな最終を迎えられている。	今後もホームに出来得る最良の支援を、引き続き支援されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応の勉強会は消防署より来て頂き実践方式で行っている。今後も継続して実践力につなげていきたい		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練は年に2回バリエーションを変えて訓練を実施しているがその他の災害時の訓練や勉強会が行えていない	消防署の参加協力を得た火災訓練やAED講習を実施している。訓練後の総評では、真剣に取り組んでいることを評価されている。以前炊き出し訓練を一度行っているが、直近は火災以外の訓練や勉強会は行っておらず、敷地内の倉庫に備蓄を確保している。地域消防団とはホームの祭りに協力が得られており、入居者をはじめ現状を知ってもらおう機会ともなっている。	熊本地震ではホームに大きな被害がなかったことは幸いであり、今後は自然災害を風化させる事なく、机上を含め訓練を実施し有事に備えていかれる事が必要と思われる。また、火災は火を出さない事が一番であり、今後はコンセントの埃など細やかな安全チェックに期待したい。管理者は以前のように消防団の力を借りた訓練を行いたいとしており、実現が期待される。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみが馴れ合いにならず人格やプライドを傷つけないような言葉かけを大切にしている。必ず本人のペースに合わせて意向を確認している。居室は利用者個人の大切な空間であることを忘れずに必ずノックをし同意を得て入室している	職員は本人の希望やペースを理解し、日々の支援にあっている。また、馴れ合いの言葉使いなどについても十分配慮することを申し合わせている。食事支援の中でその方の好物、黄粉を掛ける際も、「黄粉を掛けましょうか〜！」「混ぜますよ〜！」と、一つひとつゆっくり、丁寧に対応する職員の姿があった。居室へ入る際は、その方の部屋としてノックや同意を得て行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を確認するようにしている。会話中の表情やしぐさも判断材料として大切にしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1人1人のペースを大切にし対応しているがケアが重なり待つて頂く事も増えているがその際には理由を伝えお詫びをしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入所前の習慣や好まれること(化粧水・化粧・マニキュア・ピンどめ)は継続している可能な方は外出時の服や靴を選んで頂いている		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備や片付けができる利用者が減ってきているが、会話から好物や食べたい物をメニューに取り入れるようにしている。 苦手なメニューの時は変わりの物を準備している盛り付けなども利用者のこだわりを大切にしている	献立は職員が季節感や入居者の要望などを取り入れ作成し、苦手なメニューには代替えを用意している。また、ご飯が残った時には黄粉を掛けると進まれるなど、個々の好みなどに応じて対応している。介助が必要な方が増えているが、残さず食べてもらうのが何より嬉しいと職員は語っている。入居者には味の評価をはじめ出来る事で食への関わりを支援しており、職員も同じものを食べる事で思いを共有し、次回の献立への反映など楽しい食事支援に繋げている。	味噌や醤油をはじめ、専門店からの購入が行われており、それらについても家族へ伝えることで、更に安心に繋がると思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	必要な利用者には水分チェック表を活用している。本人の好きな物や食べたい物補助食品での捕食も行っている。 納豆、梅干し、漬物など習慣も継続している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の意思を確認し本人の負担がないようなケアを行っている。口腔状態に応じてケア用具、方法は変えている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し利用者の表情、動きを常に見守り受け入れを確認しトイレへ誘導している。その日の体調などにも配慮しケアの方法は変えることもある	排泄チェック表の活用や普段の関わりからサインを把握し、失敗の無い排泄が出来るよう支援している。昼間は布や紙パンツを使用される方もあるが、終日テープ式オムツの方も多くなっている現状である。トイレは3か所設けられており、使い慣れた場所や空気を確認した職員の誘導も行われている。起床時のオムツ交換もすぐに対応する方、希望で先ずはトイレの支援後に行うことで、一日をスタートする方など、職員のこれがベストとの思い込みではなく、その方、時々で対応がなされている。	職員の思い込みではなく、その方、時々で対応していくには、職員の日頃の観察力や入居者との信頼関係などが大きく関与しているものと思われる。排泄は尊厳や快適な日常生活にも繋がっていくと思われ、変わらぬホームの姿勢や取組に期待したい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食時に飲むヨーグルトや牛乳を提供したり、オリゴ糖、からいもを活用している 腹部マッサージやホットパックも必要に応じて実施している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴剤やこだわりのシャンプー類を使用する利用者もいる。入浴が苦手な方には会話や歌で安心した入浴に繋がるように工夫している。利用者の希望に応じて提供できるようにしている	週2～3回入浴される方が殆どであるが、毎日楽しめる方など体調や希望に応じ支援している。入浴を好まれない方もいるが、無理強いせず週1回の入浴と着替えにより対応している。入居者の身体機能の低下は否めない現状であるが、可能な限り中に浸かってもらい、会話や歌などにより入浴を楽しんでもらえるようにしている。また、好みのシャンプーなどを持ち込まれこだわりの入浴時間を持たれる方もおられる。	窓からの採光は圧迫感の無い寛ぎの時間に繋がっていると思われ、窓棚の物品については、別の場所で管理されることを期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床、消灯は1人1人の生活リズムに合わせてバラバラに対応している。気持ち良く眠れるように室温、湿度、明るさ、加湿器、湯たんぽ、玄米パックなども活用している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事表をファイリングし確認できるようにしている。受診時の内服変更時には記録に経過を残し共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	寝る前のワイン、定期的な外食や買い物など続けている。介護予防拠点活動によって地域の方と関わる機会が張り合いに繋がっている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	出来る限り希望に沿うようにしている。(散歩、運動、外食、自宅への外出など)以前より減っているのも事実である	以前より機会は減っているが、敷地内や近隣の散歩をはじめ、家族の協力により受診やその後の買い物、自宅への帰省などが行われている。地域資源の活用として物産館の利用や、個々に応じて歩きや車いすで神社への花見などに出かけている。菜園作りも入居者の状況から積極的に関わられる方はおられないが、職員が草取りを行う際は、外気浴を兼ねデッキから応援の声掛けをされている。ホームは介護タクシーとの連携も出来ており、入居者の外出を支えている。	「墓参りに行きたい」や「時計を買いたい！黒の男物のようなのがよか～！」など個別で外出への希望を出されている。また、管理者は「いだてんミュージアム」への外出も語っており、実現に期待したい。入居者の状況や職員数などにより、戸外に出る事も難しくなっていくことを想定し、今後の課題に挙げている。家族の協力も得ながらその時々で入居者の外出を支援されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	可能な方は自己管理されており受診時や買い物時には自身で支払いされている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	贈り物や手紙が届いた際には本人と一緒に電話をし直接御礼を伝えられるように支援している必要に応じて手紙の代読をすることもある		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり旬の野菜が届いた際には一緒に眺めたり季節感や生活感を味わって頂く。スタッフの私語や足音など音や光、温度、湿度も配慮している	家庭的な雰囲気のリビング食堂には、畳の間を設け冬場は炬燵が準備されている。入居者の身体状況や相性などによりテーブルや席を配置しており、テーブルの角には補助力バーを付け安全に配慮している。季節に応じた室温管理に努め、外気や草花、野菜などに目を向けてもらい季節を感じてもらえるようにしている。また、職員自身が大切な環境であり、足音や声のトーン、関わり方などにも全員が意識をもって支援にあつたている。	換気や手洗いなどの徹底により、インフルエンザに罹られた方は、開設から1名のみである。今後も入居者にとって居心地の良い環境について様々な面から取り組まれることを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ウッドデッキや畳の部屋、廊下やリビングに椅子やソファを設置し思い思いに過ごせる居場所の工夫をしている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際にご家族と話あい使い慣れた親しみのある物をご持参頂いている好きな花やひ孫の写真などを本人の目線の先にくるように工夫し掲示している	畳の間や洋室に畳が敷かれた居室には、家族の協力により使い慣れた品や、心の拠り所となる大好きな花、思い出の写真、中には遺影や位牌、おりんを持ち込まれた方もおられる。最近はおりんを鳴らされることはないが、職員が仏飯を準備し手を合わせて一日をスタートされている。入居後も本人が居心地よく過ごせる環境を家族と進めており、布団敷きからベッドへの移行など希望や身体状況に応じて変更も行われている。また、室温管理にも配慮し、冬場は特に加湿器や濡れタオルを下げる等工夫している。	食事などを済ませ居室へ戻る際、「お父さんたいま！」と、遺影に声をかけ入室される方など、本人にとって穏やかに過ごせる場所となっていることが伝わってくる。持ち込みの多少に限らず、今後も一人ひとりにとって居心地の良い居室環境に努めていかれる事を期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来ることを理解し一人一人に応じた行動を見守り安全に生活できるように支援している		